

ほっ きょく

北極のムーシカミーシカ

いぬい とみこ作 / 瀬川康男絵



北極のムーシカミーシカ

いぬい とみこ作／瀬川康男絵

愛蔵版わたしのほん理論社



《作者紹介》

1941年 京都平安女学院専攻部保育科卒

主著「ながいながいペンギンの話」理論社（毎日出版文化賞）

「木かげの家の小人たち」福音館書店（国際アンデルセン国内賞）

「北極のムーシカミーシカ」理論社（国際アンデルセン佳作賞）

「七枚のおりがみと……」実業之日本社

「うみねこの空」理論社（野間児童文芸賞）

「ぼくらはカンガール」福音館書店

「空からの歌ごえ」理論社

「みどりの川のぎんしよきしよき」実業之日本社

現住所：東京都中野区上鷺宮3-9-1-148



1968年初版

NDC 913

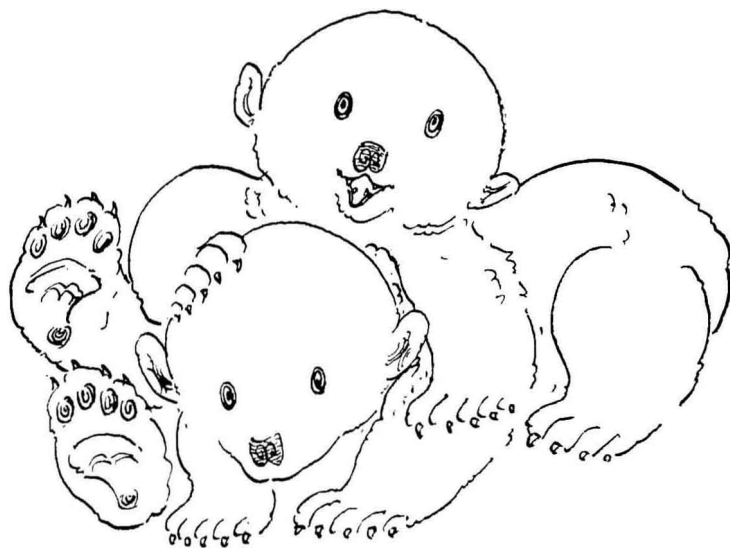
理論社の愛蔵版
わたしのほん

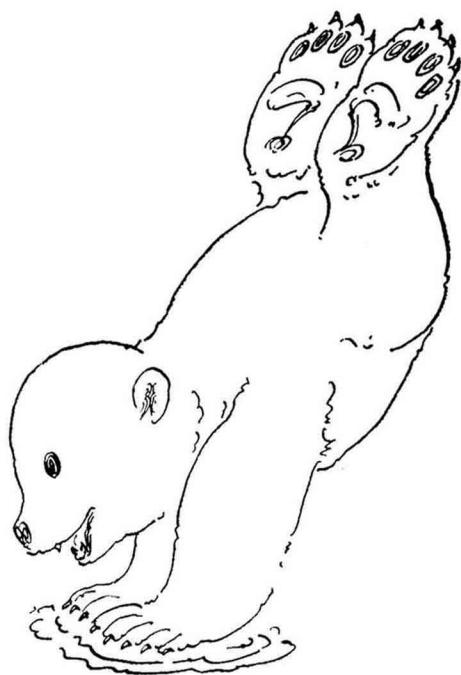
定価	発行日	発行者	発行者	画家	作者	北極のムーシカミーシカ
五六〇円	一九六八年十二月 第一刷	株式会社 理論社	小宮山量平	瀬川康男	いぬい とみこ	
		編集・東京都新宿区若松町一〇四 電話（二〇三）五七九一・五				
		営業・東京都千代田区神田神保町一〇六四 振替東京九五七三六 電話（二九四）六五〇四				

はじめに

これは北極^{ほっきょく}にちかい氷^{こおり}の国^{くに}にうまれた、北極グマのふたごの物語^{ものがたり}です。そのあたりには、九月^{がつ}からはじまる長いきびしい《冬^{ふゆ}》と、六月^{がつ}から八月^{がつ}ごろまでつづくみじかいあかるい《夏^{なつ}》との二つ^{ふた}のきせつしかありません。自然^{しぜん}の力^{ちから}のおそろしくつよいこの北極^{ほっきょく}で、ふたごの子グマたちは、くろい目をかがやかせ、アザラシや白鳥^{はくちよう}やエスキモーの子どもと、愛情^{あいじやう}をかわしながら、げんきにそだっていきます。やさしくて、しっかりもののかあさんグマに、まもられながら……

いぬい とみこ





もくじ

はじめに／1

I

ゆきの下の《家》へ 6

ふたごが うまれた 16

はじめて そとへ 27

ムーシカとミーシカを さがして 37

ムーシカひとりでは いあがる 47

ムーシカとユーリ 57

II

にんげんが……ちかくに？ 66

ババーン、バン 77



III

あ と が き	203	《夏 なつ のまつり》Ⅱ	190	《夏 なつ のまつり》Ⅰ	177	エスキモーの子 こ タヤウト	169	大 おお グマの岩 いわ へ	158	《ものしりのムー》	147	夏 なつ つげ鳥 どり	136	赤 あか いマリとオーラのなかま な と	128	冬 ふゆ のねむり	117	みじかい夏 なつ	106	およぐけいこ	96	むすめマーシカ	89
------------------	-----	-----------------------------	-----	-----------------------------	-----	-------------------------------	-----	--	-----	-----------	-----	---	-----	--	-----	--------------------------	-----	-------------------------	-----	--------	----	---------	----



そうてい・さしえ

瀬川康男

(せがわ・やすお)

I





1 ゆきの下の《家》へ

地球^{ちきゅう}のてっぺんにちかい、北極^{ほっきょく}のうみに、北極グマのかあさんがすんでいました。
冬^{ふゆ}です。

かあさんグマは、ゆきの土手^{どて}の下に、大きいあなを、ほりはじめました。からだが、
すっぽりとはいるくらいの、ふかい、ふかい、ゆきのあなを……

北極海^{ほっきょくかい}といわれるこのへんのうみでは、お日^ひさまがもう、みんなにさよならをするき
せつでした。夏^{なつ}のあいだ、きらきらとまぶしくていらしていたお日さまは、このご
ろは、朝^{あさ}ゆっくりと空^{そら}へのぼってきたとおもうと、すぐにつめたいうみにしずんでいき
ながら、

「もう冬^{ふゆ}だよ」

「冬のしたくを、おいそぎよ」

と、北極ほっきょくの生きものたちに、おしえるのでした。

「北極グマさん、さようなら」

「わたしたち、おさきへ、いきますよ」

ガンやカモや白鳥はくちようのなかまたちは、まっさきに、南みなみの空そらへとびたっていきました。夏なつじゅう、にぎやかにさわいでいた鳥とりたちの声こえが、青あおい空からきえてしまうと、あたりはさびしくなりました。

そしていま、北極ほっきょくにちかいこの島しまにいるのは、ゆきのあなをせっせとほっている、かあさんグマひとりになりました。

でも、かあさんグマは、まだ、ほんとにひとりぽっちになったのではありませんでした。

かしこくてつよいとうさんグマが、じきにかえってくるでしょう。北極のうみべでだれよりもりっぱな、《ものしりのムー》は、かあさんグマのたべものをさがしに、出でかけていたのでした。

（なんて、ムーは、おそいんでしょう？ わるいことでもおきたのでなければいいけれど……）

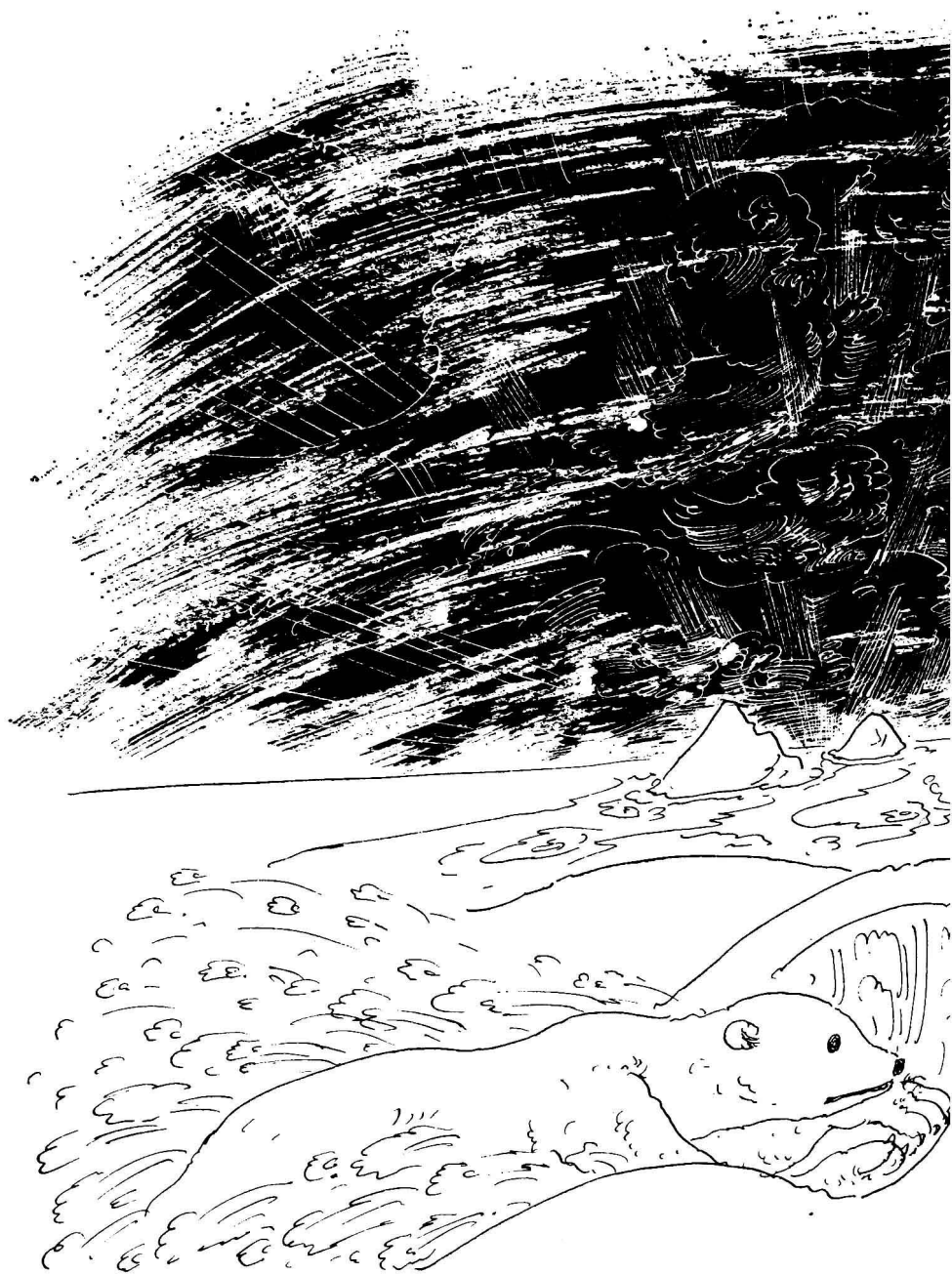
かあさんグマは、ゆきをほる手てをとめて、くらくなつた、うみの上うみを見みつめました。

うみは、はてもなく、つづいていました。しずんでいったお日さまの光^{ひかり}が、うみの上の空^{そら}を、だいたいいろにそめていました。

(ムー、早く^{はや}かえってきて！)

かあさんグマは、ほっほっと、白い^{しろ}いきをはきながら、あなほりのしごとを、つづけました。





ひゆうっと、つめたい風かぜがふきはじめて、あたりはまっくらになりました。こなゆきが、お日ひさまのなごりの光ひかりを、かきけしてしまったのです。

北極ほっきょくグマのかあさんは、かおをあげました。ああ、こなゆきの中に、なつかしい《ものしりのムー》のにおいが……

高くたか高く、かおをあげて、まっているかあさんグマに、どしん、と、だれかが、ぶつかってきました。こなゆきのまくは、すぐ目めのまえのものも、あつくつつみこんで、かくしています。

「あ、おかえりなさい。ムー、わたしよ」

「……ああ、おまえ、ぶじだったかい？」

《ものしりのムー》は、ゆきの上に、どきっと、なにかおろしていいました。それは、こおって、ピンとした、みごとなニシンのえものでした。

ムーは、おいしそうなニシンを、かあさんグマにわたしてやりながら、いいました。

「ずいぶん、とおくまでいってきたよ。もうこのちかくには、なんのえものもいやしないんだ」

「そうでしょう、もう十月がつですもの……あなたも早くはや出でかけなければ……」

かあさんグマは、ひさしぶりのごちそうを、しずかに、かみながらいいました。

「冬の《家》^{ふゆ}のよういは、できたかい？」

とうさんグマが、ききました。

「ええ、もう、あとひといきよ。あそこにじつとこもっていれば、どんなにゆきがきてもだいじょうぶ。ねえ、それよりもムー、あなたは早く出^でかけなくては……」

風^{かぜ}は、いよいよ、つよくなりました。まっ白^{しろ}いこなゆきが、はりのように、二ひきのクマのかおをつきさしました。

「そうだ、わたしは出^でかけなくては……」

ムーが、しずかにいいました……冬^{ふゆ}が、ほんとうにはじまったのです。らいねんの六月^{がつ}ごろまでつづく、くらいおそろしい、北極^{ほつぎよく}の冬^{ふゆ}が。

このちかくに、さいごまでのこっていた北極グマたちも、もう一びきものこっていませんでした。

「こんどこそ、わたしの出かけるばんだ」

《ものしりのムー》は、じぶんにも、かあさんグマにも、いいきかせるようにいいました。

かあさんグマは、だまっていました。

すぐちかくにあるかあさんグマの目が、しばしばと、いくどもまばたくのを、ムーは見ました。そこで、ムーはやさしくいいました。

「子どもたちに、あえないのが、さんねんだ……それに、おまえはひとりぽっちだね……くらい、ゆきのあなの中で……」

かあさんグマは、だまっていました。いよいよ、ムーに出かけられてしまうのは、ほんとうに心ぼそかったのです。きょねんまで、かあさんは、わかいむすめのクマでしたから、北極のうみをながれる氷のボートで、すきなところへ出かけることができました。でも、ことは、ちがうのです。北極グマのくにで、かあさんグマがだれでもそうするように、長い冬のあいだ、ゆきの下のあなの中で、ひとりぽっちでくらさなければなりません。そこで、赤ちゃんをうみ、赤ちゃんをまもってやらなければなりません。

かあさんグマは、白いまつげから、しばしばと、なみだをふりおとして、とうさんグマにいいました。

「だいじょうぶよ、ムー。知っているでしょ、ぼうやをまっているわたしには、このゆきの下の《家》が、どこよりも安全なくれがだということを。それに、すがたは見えないけれど、ちかくのゆきの土手の下には、北極グマのかあさんたちが、ねむっていますよ。きっと、わたしたちがするように、とうさんグマに、ゆきの屋根をこしらえても

らって……」

よく朝、お日さまの光が、^{*}うみのこまかいうき氷の上に、火の粉のように、かがやきはじめたころ、かあさんグマは、じぶんのほったあなのおくへ、しずかに、よこになりました。

《ものしりのムー》は、かあさんグマのそばに、こおったニシンをおいてやりながら、いいました。

「おやすみ。よく、気をつけてね」

「あなたも、ムー、よく気をつけて。氷のうみをこえていく、あなたこそ、ほんとにしんばいよ」

「だいじょうぶだとも、わたしのことは……。子どもたちが大きくなったころ、またげんきであえるだろう。むすめがうまれたら、名はマーシカ、むすこがうまれたらムーシカと、名まえをつけてやってくれるね？」

とうさんグマは、いいました。

「ええ、女の子だったら、名はマーシカ、男の子だったらムーシカと、よびますとも」
かあさんグマがそうこたえると、《ものしりのムー》は、あなのそとへ出ました。そ



して、そこからゆきのかたまりで、かあさんグマの《家》^{うち}の天井^{てんじやう}をふさぎました。「ありがとう、ムー。氣^きをつけていらっしゃい！」

「さようなら。ぶじで、おくらしよ」

こなゆきが、みるみるうちに、かあさんグマの《家》^{うち}にふりつもり、とうさんグマのふさいだ天井^{てんじやう}をしずかにかくしていきました。もうじき、ここは、だれが見^みても、ただのゆきの土手^{どて}としか、見えなくなるでしょう。

とうさんグマは、おもたい足^{あし}どりで、うみのほうへ、あるいていきました。

お日^ひさまが、だいたいいろいろのランプのように、うみの上をてらしています。

(さようなら！ ムー、氣^きをつけてね！)